会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和元年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」  Ⅰ．教職員の資質能力向上の推進　（ⅱ）教職員研修プログラムの構築事業 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第4回学習評価研修WG |
| 開催日時 | 令和元年10月28日（月）10:00～13:00 |
| 場所 | 新潟コンピュータ専門学校 |
| 出席者 | 委員：岡村慎一、近藤賢宏、植上一希、小田茜、佐伯京子、佐藤昭宏  事務局：飯塚正成  オブザーバー：疋田、丹田  （合計9名） |
| 議題等 | 〇植上より全体説明  〇小田よりYIC調査報告および評価シートについて  １．調査報告のレジュメに基づき報告  ・場面と能力が混ざった評価シートになっているがどうか？  ・学生自身が自己評価項目を作成し自己評価をすることについてはどうか？  ＊評価シートはトライアル。これをもとに実習などを評価できるように。意見をもらいたいのは、修正点・改善点などについて。（植上）  ＊非認知スキルの要素が含まれている項目と、学校側が評価したい項目とが混ざっているのが現状。ここからスタート。チームワークやマナーなどは自己管理とか協調性などが当てはまる。それに置き換えたとき、教員がどう評価項目をつくるか。その翻訳作業が必要になるが、まず黄色の項目部分が出てきたのは成果。（佐藤）  →前回の聞き取りでは十分説明できていない。  ＊学生が記入する？（植上）  →教員も同じものを使用し学生を評価する。教員の評価と学生の評価との差異がわかる。  ＊２枚目の教員シートの位置づけは？  →学生が評価するまでもないが、教員が評価するために必要な項目をまとめたもの。現段階で必要かはわからない。  ＊能力養成項目との紐づけをしないと、何を能力として育成しようとしているのかがわからない。そうしないと、自分の能力のなにがわかったのか言語化できない。（岡村）  ＊アウトプットした能力、コメントできると、振り返りの学習になるのでは。何をみてよかったか悪かったか。自由記述のようなかたちで。評価の根拠となる態度やしぐさなどを言語化する。そうすると学習につながる。  →先生側の言葉にもう少し落とせると。リバイズしていく必要。（佐藤）  ＊現段階では、混在している。設営準備などは能力を評価するための題材になる。左側の項目に来るものではない？（植上）  ＊三段階に分けているが、この段階ごとの項目は一致させなければいけないのでは。事前から事後にかけてどう変化したかという点。能力は段階ごとに共通していないと意味がないのでは。（植上）  →診断・形成・総括的評価とあまり関連させられていない。  →イベントそのものに対する定義が明確化されていないので、今のようなトレースができない。「こういうことができたらいいよね」ということしか持っていないので。このイベントはなんのためにするの？という定義は必要。そこと紐づく非認知能力を。（岡村）  →項目は2つか3つでよい。どういう非認知スキルを高めたいのか（佐藤）  →診断・形成・総括という区分。みだしなみや設営準備も活動内容に入っている。活動が始まった段階での「設営準備」。（植上）  →事前にみるタイプと、スポットでやるタイプとがある。（佐藤）  →これをする意味は？あることをやったことで、ある能力がどう伸びたのかを測るものでは。これを作っておいて、さらにもう一枚作ってもよいが。（植上）  →「チームワーク」で焦点化する。事前準備ではこういう行動が考えられてこういうことができているか、など行動ベースで。（佐藤）  →非認知スキルがワンショットで、一日で上がったかを見るのは難しい。ただ、そこでアウトプットした行動がそれに繋がっているという自覚が、自己評価に繋がり、能力の向上になるという構図だと思う。自己評価と他者評価の違いを見るのが狙い。ただ、ボランティア活動とするなら、なぜボランティア活動をするのか？という大前提の中での学習目標が議論されないといけない。非認知スキルのどこを目標としているイベントなのか。なんの狙いを求めているのか。力点があるはず。20何個の能力の内のどれにするのか、と。（岡村）  →ボランティアという言葉は使わないほうがいい。「実習応用科目」。その中でどういう能力を評価したいのか（佐藤）。  →紐づけして再定義は必要（岡村）。  →それもそうだし、診断・形成・総括との関連についてもう一度YIC教員と議論が必要か？（小田）  ＊実習応用科目は、宇部まつりだけでなく、他にも？（植上）  →実習応用科目がいろいろ存在していて、今後ボランティア活動もそこに位置づけたいと。（小田）  →専門学校の学校行事が、評価プログラムとして位置づけられているのか、特別活動ではなく、何かやっていますよという位置づけられ方なのかが整理できていない。それが今言っているところ。（岡村）  →今している実習応用科目のことを聞きつつ、そこで測りたい能力、診断・形成・総括で。それを整理するのが理想。そのうえでボランティアを実習応用科目につけるとしたらどうするかを考えるのが一番。（小田）  →非認知スキルの何を目的にしてやってみて、総括するというのが落ち着きやすいか。一人一人が微妙に違う。近藤先生がやっている実習、医療事務もそうだが。事前に目標を挙げて、それを総括するというやり方。学習科目としての目標は教育としてあるが、一人一人非認知スキルは多様。その温度差をパラメータは複数のものが存在。ワンセッションでの事前・事後はあってもいいのかなと思ってデュアルの時には主張していた。（岡村）  →現実的に3日までに大きく変えるのは無理。オモテ面はたたき台として修正を。能力との紐づけと、活動との関連。（佐藤）  →goodとbadの項目を。（岡村）  →応用編の研修とこれがどう関係するのかがわからない。3日の評価シートをどう作ればいいかという話をしている。本来はそのシートを学校側が作れれば。情報としてはいいもの。だが、応用編との関係は？またそのゴールは実際教員がこれを作れるように。（飯塚）  〇応用編の流れについて、植上より資料に基づき説明。  ・2時間目、どういう評価シートを作ればよいか？  ＊ワークの時に時間がかかってしまうのでは。あとは模造紙を回覧できるように。データ化してPCなどで保存できれば。プロジェクターなどに投影してもよい。持ち帰りができるとよい。（近藤）  ＊確かに模造紙は持って帰らないので。（佐伯）  ＊アプリもある。写真にとっておいて、後から並べ替えられるようにしておくとよい。（岡村）  ＊非認知スキルのイメージ、職員のイメージは？（岡村）  →実際にワークをやってみたときにも混在してしまった。職員の感覚で専門能力か非認知能力化は違う。（近藤）  →ただその作業は重要。その難しさに気づくことは重要。（佐藤）  →抽象的なキーワードに自分たちが思う評価観点と関係づけること、紐づけさせる作業が必要。コミュニケーションや協調性と言われても、「どっちも」となることはある。（岡村）  →授業担当の先生が自分で評価項目をつくれるようになるのが目的。記述するところが重要。その先生はその行動を紐づけて評価しているんだ、ということがお土産になれば。（佐藤）  →非認知スキルという定義そのものがある。頭の良い人は言語でやりとりをするが、現場の人たちがそれにすり合わせられるようにしておかないといけない。これを作れる教員がいないという状況がある。あなた方が言っていること、こういう行動や所作で評価していることってこの能力に紐づけられるよね、というように繋げられれば。非認知能力はこれだけある、これを高めるために何をしていますか、という議論の方がよいか。（岡村）  →19項目は最初に示す。ただ、19項目も重なりがあるし、学科によって重視する点が違う。19個の中からどれを重みづけするのかが最初か。（植上）  →そういうマトリックスみたいなものができて、先験性ならそれをするための科目やイベントがこれとこれがあるよね、授業形態としてアクティブラーニングをやっているよね、ということと紐づけられると、先生方は自分で評価プログラムや学習課題が立てられる。  →それがIRCでやろうとしていること。19個ある中で、IRCさんは4つ選びました。それをもとにカリキュラムマップで位置づけてもらう。そこの機軸になる科目としてインターンがあって、そこで協調性みたいなものを評価するために評価シートみたいなものを作っていますし、シラバスをこういう風に変えましたよということを事例として紹介する。それはあくまでIRCなどの例であってという限定はつけて。各学科ではどうですか、と。（植上）  →セグメントで分けた方がいいと思うのは、一つの授業形態で育成するものと、科目そのものと、正規のカリキュラム以外のものもあるということ。どれで項目を育成しようとしているのか。  →IT分野は非認知能力とはというところから理解しないといけない。基礎をやっている人は段取りをわかっている。ただ非認知能力をどこまで理解しなければいけないか、そのための時間が足りないのでは。事前学習として、読み物としてあれば。ある程度同じ目線に立ったうえでやって、ぎりぎり３時間か。植上や小田が入り込んだうえでなんとか成り立っているという感じ。事前にやっていないと、プログラムにならない。前提がない感じ。（飯塚）  →京都での研修では事前学習を行った。新潟の場合はそれを行っていなかったので、理論との紐づけが難しかった。知識ベースはあったほうがよい。（岡村）  →自分の授業でどの能力を育成しようとしているか、丸をつけてもらうということでもよい。（佐藤）  →このままでは非認知能力をみんなが知っていることが前提。それを最低限しっていないと、有効性が下がってしまう。（近藤）  →大きな社会のフレームを専門学校の教員が知っているかと言われるとそうではない。非認知能力はすぐに上がるものではないとはわかっているけど、それを計画的にやることは考えていなかった。それをできるようにというのが今回の一つの願い。（岡村）  ＊アイデアは二つ。一つは1時限の説明を伸ばす事。いい題材があればいいが。（植上）  →自分はどういう力を育成しているのかを事前に考えてもらう。自分に引きつけて。そういうワークを。（佐藤）  →ICTは事前にビデオ学習して、指導案を持っていくということをやっていた。負荷はあるが、しっかりやってきた。（飯塚）  →書き換えのワークがある、そこにつながるようなシラバスを持ってきてもらう？（佐藤）  →最初は考えていたが、懸念するのは、非認知能力が難しいため、結局「人間力」と言った言葉で丸めてしまうこと。それは意味がない。（植上）  →授業でどう生かすか。ただそれをアウトレットして世間に見せないといけない。それが専門学校に求められている。シラバスも公開しろと言われて学習目標も出しているが、あまりにもチープだということで非難も起こっている。（岡村）  →どれだけ行動ベースで基準に落としているか、が専門学校の強み。（佐藤）  →普段やっていることを言語化する、その枠を落としてくださいということ。（植上）  →言語化するときの引き出しが増えることがワークでは重要では。他者の分解の仕方や評価の手順を知ること。（佐藤）  →その場で説明するより、事前に考えることが重要。（飯塚）  →そういうかたちでも大丈夫だとは思う。（近藤）  →事前学習がある研修は多い。（佐伯）  ＊GW１を事前学習として、それをシェアするというイメージか？（植上）  →そう。  ＊事前課題のための資料作りが必要。（植上）  ＊1時間目で非認知能力に説明をしたり、事前学習の共有などを行ったりする。事前学習は個人で。（植上）  →個々人で付箋に書いてきてもらう、くらい。A３のシートを配っておいて。（佐藤）  →手書きより入力の方が好きな人もいる。（佐伯）  〇2時間目について。  ＊評価シートの1枚目と2枚目の違い。1枚目はこのままで。2枚目を、非認知能力ごとに整理できるようなシートにすれば。1枚目は事項。それをもとに、非認知能力に置き換えてもらう。置き換えてもらったものをこちらで素材として使う。（植上）  →出てきたものを、というほうがいい。（佐伯）  ＊2枚目について。3日は１枚目をベースに。非認知能力の項目でどうわけられるかを。  →2枚目はそこまで必要ないかもしれないが、教員が書きたいなら。（植上）  →1枚目にないものを記述。それをあとで考えるための材料として。  ＊行動を網羅するだけでいっぱい。能力と紐づけるのは活動中は難しい。ただ、行動については書き留めておくように。なんで気になったのかは、こういう能力について気になったからだよね、ということが事後的にできれば。（岡村）  →良かった点や反省点、なぜそういう風に書いたのか、メモ欄を。  →学生たちにとっては単に気づきを、教員は項目を評価できるように。学生と教員とで少し違うものを作成。  ＊能力にもとづく評価シートの作成を３名で。そこまでできれば応用編の良い事例になるのでは。モデルだけでも早く作りたい。  〇3時間目について。  ＊学科で授業を一つ選んでもらって、書き換えということを想定しているが、それでよいか？あるいは個人のシラバスを？（植上）  →美容ならメインの科目がある。ただ、学科による。先生たちが複数で教えている科目はある。主たる科目。常勤が担当しているもの。（佐伯）  →IRCならインターンシップ。受け入れる側が知りたいはず。それが評価シートで出てくると。あるいは外部の人が来て行う授業、評価方法を明確にすることが必要。（近藤）  ＊非認知能力を評価する上での尺度や方法の最適化は事前学習でやっている？（岡村）  →できていない。だが、基礎編で少し行った。（植上）  →よくあるのが、非認知能力を目標にしているのに試験はペーパーで書かれると悩む。（岡村）  →一時間目に振り返りはしようと思っている。非認知能力はそもそも点数化できないものですよね、ということを基礎編でやりましたよねと。（植上）  →それが事前にある程度整理されていないと到達目標や評価方法とかって言われたときに、バリエーションが出てこないのでは。やったか？はーい！では非認知能力にならないが、平気で言いそうな気もする。（岡村）  →曖昧なことをやっている自覚も必要。だから横断的・継続的にやっていかないと、カリキュラムマネジメントが必要だよね、という話になればすごい。専門学校は先生同士で手をつなげられるのが強み。その強みに気づければ。資質の問題に落とし込んでしまわないで済む。（岡村）  ＊前提はしっかり行う。シラバスは複数教員が行うものを。限定のかけ方は近藤先生に依頼。（植上）  〇11月3日について。  →メールで使用感を聞くのは不十分。もう一回調査を増やす？（小田）  ＊非認知能力と言うテーマが難しさの一つ。あともう一つはやりっぱなしになっていること。継続的にやっていけるかどうか、ということ。学んでみましょうではなく、定着させること。それをしないとプログラムとしては微妙。（飯塚）  →それは３時間目のワーク？（佐藤）  →それはあくまで研修のなかでの書き換え。現実を踏まえた書き換えではない。それをもとに実際運用にまで移せれば。まずは個人が何かやれればというイメージ。初めから学校全体では難しい。個人が集まって学科、学科が集まって学校。（飯塚）  →負荷はないか？（佐藤）  →どの時期に書き換えるか。そういう話に触れるだけでも。（近藤）  →一番いけないのはやりっぱなし。学習評価を教員が実際にできるようになったかどうかが重要。（飯塚）  →研修の課題としてやるのか、それとは別個なのか。（植上）  →１か月前の事前学習、研修は１泊2日、その後3か月たってもう一度集まる、というのが飯塚さんのやっている研修。それでパッケージになる。（飯塚）  →来年度のシラバスをというところだが、現状のコマシラバスや学習評価の見直し。そういったところにどれだけ反映できているかどうかは、２～３か月後でも評価できる。年度末にかけて、今までの学習評価の仕方はペーパーだけだったが、こういう定性的なレポートも含めていますなど。そういうことを先生たちが考えるきっかけとして、今のちょっとした小さな改善として何をしたかは年度内でも可能。（岡村）  →それを追うのは可能か？（植上）  →既存の科目に対し、こういう評価方法の改善を、今のできるなかでしておこうと思いますか。結果としてどう変わりましたか、を3か月後にレポートで出してもらうというのはあり。（岡村）  →非認知能力に立ち入るというということは、そういうマインドが必要。（岡村）  →ゆっくりでいい。ただ確実にフィードバックを。（飯塚）  ＊フィードバックを求めるために、シラバスの改善動向を調査校に依頼。次年度にどう生かされているか。（植上）  〇11月KBCと12月YICの講師について。  ＊11月KBC　1限：植上　2限：佐藤　3限：植上  ＊12月YIC　1限：植上　2限：佐藤　3限：小田  →11月7日にIRCへ。そこまでに評価シートの枠を。それが終了した段階で講師側にフィードバック。それをもとに2時間目の時間を作成。  〇基礎編の原稿について  ＊リライトの日程は？  →1月20日の学習評価WGまでに基礎編完成。  〇応用編のアンケート作成について  →どのあたりの情報をとるか。アンケートではなく「改善例」のようなもの？  →汎用性を持った教育プラグラムとして。他校でもできるか、自分にとって役に立ったか、などは必要。内容はトライアルなので、改善していくためにどういう情報が必要か？  →基礎編をベースにしたものを。 |

以上